

平安時代の「スク」語幹語彙の語義比較小考

——スクム・スクヨカとスクスク（ト）・スクスクシ——

久保 香珠

〔キーワード〕①平安和文 ②派生語 ③語幹 ④意味 ⑤スク

【要旨】平安時代和文資料において、語幹「すく」を共通に持つとされる派生語四語——動詞「すくむ」、副詞「すくすくと」、形容詞「すくすくし」、形容動詞「すくよか」——の語義を和文資料二二作品を対象に調査し再検討した。四語は語幹「すく」が共通するため一括りにされて、意味的にも同源で相互に近似すると解される傾向がある。しかし、単純形「すく」と重複形「すくすく」では上代から意味的に異なる傾向が認められる。単独形「すくむ」「すくよか」には共通点が多く「固さ」と「強さ」を原義にもつ。一方、重複形「すくすく（と）」「すくすくし」は、「動作や変化過程がスムーズである」ことが原義として認められる。つまり、単純形系統と重複形系統は少なくとも奈良平安時代では形態的にだけでなく意味的にも別の二系統に分かれていると解釈できる。なお、平安時代後期になって、形容詞「すくすくし」と形容動詞「すくよか」の意味が接近し、いずれ

も「生真面目さ」と「そっけなさ」を表すようになるが、これは語幹の近似性のため後代になって意味が接近していったものと解釈される。

一、ほうめい

平安時代の和文資料の類義語研究は、この三〇年間——『講座日本語の語彙』（一九八一—）、『国語語彙史の研究』（一九八〇—）の刊行時期を一つの画期と見て——でかなり進んできており、基礎語の意味記述は、代表的古語辞典においてもほぼ一定の水準に至り、言わば成熟期に入ってきているとも言える。

近年では、例えば、ツヤツヤ、ツヤヤカ^①等の、語幹を共有する語彙の語形成や派生の研究が特に進展しており、意味の解釈もより深まりを増してきている。

一方、語幹が共通であるために、かえってそれがマイナスになって、意味もおおかた類似するものと似たような表現でまとめられ、細部の相違が曖昧なまま記述されていたり（例えば、ナヨ系語彙^② ほか）、類義語間の意味的な関係が正確に把握されていなかったりするもの（例えば、ナヨ系語彙とたを系語彙の間の意味の相違）も見られるようである。そのような一例として、久保（二〇一四）では、ナヨ系語彙を取り上げ検討したが、今回取り上げるスク系語彙にも、同様の課題がなお残されている。

少し具体的に述べれば、スクを共通語幹とするため、辞書や先行論文などの一部では、語幹スクの中心的意義を「強い、硬い」というような意味と解釈して、すべての派生語彙（スクム、スクスク（ト）、スクスクシ、スクヨカ）を、一つの語幹を中心として、相互に派生関係にある語彙として語義もとらえられているらしいが

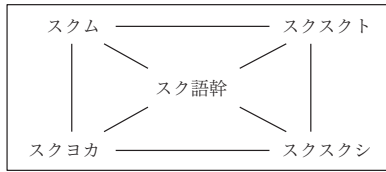


図 1

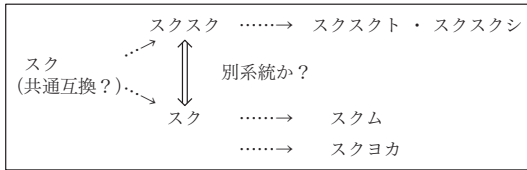


図 2

表 1 22作品の用例数

語形 \ 作品	竹取	土佐	伊勢	平中	大和	多武峰	篁	宇津保	蜻蛉	落窪	和泉
すくすく(と)	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
すくすくし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
すくよか	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
すくむ	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	0

語形 \ 作品	枕	源氏	紫	堤	寝覚	浜松	更級	狭衣	大鏡	讃岐	とりえ	計
すくすく(と)	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	5
すくすくし	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	5
すくよか	1	35	1	1	4	0	1	3	0	0	17	66
すくむ	0	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	13

ある。すこし抽象的に図解すれば、次の図1のようなイメージで捉えている節も見られる。しかし、用例を詳細に見ていくと、語幹スク系の語彙と、重複形スクスク系語幹（以下、重複系とも呼ぶ場合がある）の語彙とは意味がやや異なり、語幹スクは「硬さ、強さ」、重複形スクスクはむしろ「スムーズさ、動作の滑かさ」を表すように、近似しつつも系統が違っている様子がうかがえるのである。いわば、次の図2のような二列の系統と捉えるべきものなのである。

この二系列の元は、廻れば語幹スクとして同源なのかもしれないが、上代すでに重複系のほうがはやく出現していることからもうかがえるように、かなり早い時期から、重複形スクスク系は単純語幹スク系とは異なった意味的歩みを進めているように思われる。上代以前まで推定するのは危険であるが、あるいはひよつとすると、速度や運動のスムーズさを表す重複形スクスク系は、当初から擬音語オノマトベとして出現していて、単純語幹系とは意味がもともと異なっていたのではないか、それが後代になって語幹の近似性から、むしろ後で意味が接近した可能性もあるのではないかとすら思わせる。

本稿では、語彙の語形成研究、派生語研究の一環として、そのようなスク系語彙の相互の意味の近さとともに、異質性を解明してみることにした。

本論の調査、分析方法としては、平安和文二十二作品から用例を取り出し、それぞれの語の意味、用法を、文脈に注目して明らかにしていく。二十二作品は、以下のものである。

- 『竹取物語』〈以下『竹取』と略す〉、『土佐日記』〈同じく『土佐』〉、『伊勢物語』〈『伊勢』〉、『平中物語』〈『平中』〉、『大和物語』〈『大和』〉、『多武峰少将物語』〈『多武峰』〉、『篁物語』〈『篁』〉、『宇津保物語』〈『宇津保』〉、『蜻蛉日記』〈『蜻蛉』〉、『落窪物語』〈『落窪』〉、『和泉式部日記』〈『和泉』〉、『枕草子』〈『枕』〉、『源氏物語』〈『源氏』〉、『紫式部日記』〈『紫』〉、『堤中納言物語』〈『堤』〉、『夜の寝覚』〈『寝覚』〉、『浜松中納言物語』〈『浜松』〉、『更級日記』〈『更級』〉、『狭衣物語』〈『狭衣』〉、『大鏡』〈『大鏡』〉、『讃岐典侍日記』〈『讃岐』〉、『とりかへばや』〈『とりかへ』〉

用例調査の前段階として、『日本国語大辞典』、『主要古語辞典』(『小学館古語大辞典』、『角川古語大辞典』、『岩波古語辞典』、『古典基礎語辞典』)を中心に、語釈を概観しまとめる。辞典の語釈と先行研究の結果を踏まえて、

その結果の検証をしつつ、用例に現れる意味変化の傾向を分析する。なお、本論で用例の引用のために用いた本文は、『蜻蛉』『落窪』『源氏』『堤』『寝覚』『狭衣』は大系本により、その他次ものは以下の資料によった。なお、便宜的に漢字を当てるなど表記を改めた場合がある。

- 『古事記』—高木市之助・富山民蔵編『古事記総索引 本文編』平凡社一九七四年
『竹取物語』—山田忠雄編『竹取物語総索引』武蔵野書院一九五八年
『平中物語』—曾田文雄編『平中物語総索引 本文篇』初音書房一九六九年
『宇津保物語』—宇津保物語研究会『宇津保物語 本文と索引 本文編』笠間書院一九七三年
『枕草子』—榎原邦彦等編『枕草子総索引』右文書院 一九六七年
『紫式部日記』—石井文夫・青島徹編『紫式部日記用語索引（改訂増補）（復刻版）』牧野出版一九九九年
『更級日記』—東節夫編『御物本 更級日記総索引 本文編』武蔵野書院一九五六年
『とりかへばや物語』—鈴木弘道著『とりかへばや物語の研究 校注編 解題編』笠間書院一九七三年

なお以下では、「二、辞典での解釈」、「三、先行研究」、「四—一、単純語幹スク語彙」、「四—二、重複形式スク系語彙」、「五、まとめ」の順に論じていくことにする。

二、辞典での解釈

まずは意味論的研究の先行研究に位置づけられる古語辞典の語釈を概観する。スク系語彙で、「スク」を語根として持つ動詞「スクム」、重複副詞「スクスク(ト)」、形容詞「スクスクシ」、形容動詞「スクヨカ」について見ていく。本章で取り扱う辞典は、『日本国語大辞典二版』(以下『日国二』)と、古語辞典として主要となる四辞典、『古語大辞典』小学館(以下『小学館』)、『角川古語大辞典』(以下『角川』)、『岩波古語辞典』(以下『岩波』)、『古典基礎語辞典』(以下『基礎』)である(各辞典の詳細な語釈は後掲の表2を参照)。

動詞「スクム」は、『基礎』を除く四辞典に記載がある。どの辞典にも共通するのが、「身体が硬直する」意味と、「心や精神がかたくなである」意味である。前者については、『日国』『岩波』は「動かなくなる」、『角川』は「行動の自由を失う」とまで言及している。また、『角川』では、「物が縮んでしわになるさま」、『小学館』では、「紙や衣などが固い感じがする」さまを表すとしている。全体的に見て、動詞「スクム」は大きく分けて二つ、「固くなるさま」と「縮む、萎縮するさま」を表すことが読み取れる。ただし、辞典によってその傾向は異なる。『角川』は他の辞典に比べて「縮む、萎縮するさま」に偏っていて、逆に『岩波』には「縮む、萎縮するさま」はなく、「固くなるさま」のみが記載されている。動詞「スクム」は辞典によって大きく異なることはないが、傾向の違いがあるため、それぞれの辞典の解釈を踏まえつつ、用例調査をしていきたい。

続いて形容動詞「スクヨカ」であるが、五辞典すべてに記載がある。意味分類の数はそれぞれ異なるが、「固さ」、「さまじめさ」、「無風流」から意味が派生していることが、いずれの辞典からもわかる。最も細かく分類されているのは『日国』で、解説が詳しいのは『基礎』である。

次に、重複副詞「スクスク（ト）」についてであるが、『基礎』を除く四辞典に記載がある。語釈において共通して「滞りなく進むさま」という記述がある。『日国』のみ「よそに心を向けなくてただひたむきに進んで行くさま」という語釈が別にあるが、重複副詞「スクスク（ト）」については、辞書による大きな違いや、傾向の違いはほとんどみられない。全用例の共通点を明らかにし、また他の派生語との関連を調査していく。

最後に重複形容詞「スクスクシ」である。『基礎』を除く四辞典に記載がある。語釈には「きまじめ」「無風流」が共通しており、『日国』『小学館』『岩波』には、その周辺的な意味がある。例えば、『日国』には「そっけない。おもしろみがない。」などがある。意味の広がり著しいことがわかる。「きまじめ」「無風流」という意味の点では、「スクヨカ」と共通性があると見られていることがわかる。どの程度抽象化が起きているかなどは、用例を詳しく分析して考察する必要があるだろう。また、『日国』『角川』『岩波』では、語根についても触れられていて、「すくむ」「すくよか」などの「すく」と同根とある。ただし、『日国』では「同根か」と疑問形になっており、断言していないため、語根の関係は注意する必要がある、今回の大きな課題である。

表2 辞典の語釈	角川古語大辞典	小学館古語大辞典	日本国語大辞典
すくむ	<p>マ四①労、病、心理作用により、身体やその部位が、硬直して行動の自由を失う。 ②身体やその部位が縮まり、小さくなる。 ③物が縮んで、しわになる。 ④精神が柔軟性を欠き、かたくなである。 マ下二①身体やその部位を縮め、小さくする ②略③柔軟性をなくさせ、萎縮させる。</p>	<p>〔「する」は硬・強の意〕 自マ四①筋肉が硬直する。こわばりひきつる。 ②紙や衣などが固い感じがする。 ③心に柔軟性がない。とりすま。固くて動きがとれないかたくなである。 他マ下二 固くちぢこませる。縮める。動きのとれないようにする。</p>	<p>①恐れや緊張・疲労などからだがこわばって動かなくなる。硬直して動かなくなる。すくまる。 ②身をちぢめて小さくなる。 ③こわばる。こわごわする。 ④かたくなである。窮屈である。</p>
すくすく(こ)	<p>物事が滞ることなくずんずんと進行していくさま。</p>	<p>すみやかに滞りなく進むさま。ずんずん。ぐんぐん。</p>	<p>①とどこおりになく速やかに進んで行くさま、また、元気に勢いよく成長するさまを表す語。ずんずん。ぐんぐん。どんどん。 ②よそに心を向けなくて、ただひたむきに進んで行くさま、飾らず率直に行うさまを表す語。</p>
すくすくし	<p>〔「すくむ」「すくよか」と同根。きまじめであるさま。無愛想であるさま。〕</p>	<p>①優美さがないさま。愛敬がない。優しさがない。無骨だ。無風流だ。 ②すげないさま。ぶつきらぼうだ。つっけんどんだ。 ③飾り気がなく率直なさま。きまじめだ。実直だ。厳格だ。</p>	<p>〔「すくむ」「すくよか」「きすく」などの「すく」と同根か〕よかれあしかれ、風流さ・優美さ・やさしさ・思いやりなどのないさまをいう。きまじめである。あだめいたところがない。そっけない。情にこわい。無風流である。おもしろみがない</p>
すくよか	<p>〔「すく」は「すくむ」の「すく」と同語で、それに接尾語「よか」の接したものだ。固く、しゃんとしていて柔軟でないさま。「すくよか」「すこよか」とも。 ①体つきがしっかりしていて、元気そうであるさま。 ②心がしっかりしていて、毅然としているさま。 ③性質が生真面目で、そっけなく、とっつきにくいさま。 ④紙や衣の、固くごわごわしているさま。また、山などの険しいさま。〕</p>	<p>①紙などが固くごわごわしているさま。 ②衣服がしっかりとして折り目正しいさま。またそのような衣服を着用しているさま。 ③体が強くしっかりするさま。元気でしゃんとしているさま。 ④心を強くしっかりと持つさま。気丈でめげないさま。 ⑤分別があり、言動に節度のあるさま。また、強いて分別くさく取り繕うさま。 ⑥情味に乏しくいかついさま。また、体力や武力にすぐれているさま。勇猛。</p>	<p>①からだつきがしっかりしているさま。 ②健康であるさま。元気であるさま。しゃんとしているさま。 ③ごつい感じであるさま。また、たけだけしいさま。 ④心が強くしっかりしているさま。毅然としてたじろがないさま。 ⑤性質や行動がきまじめであるさま。なまめかしさや風流など心がなく、律儀なさま。剛であるさま。 ⑥無愛想で、とりつくしまもないさま。そっけないさま。 ⑦紙などが、かたく、ごわごわしているさま。 ⑧山などがけわしいさま。</p>

平安時代の「スク」語幹語彙の語義比較小考

表2 辞典の語釈	岩波古語辞典	古典基礎語辞典
すくむ	マ四①硬直して動かなくなる。 ②緊張し、固くなる。しゃちこぼる。 ③柔軟性がなく、ごわごわする。こわばる。 マ下二①こわばらせる。また、ごちなくする。 ②身動きならぬようにする。	記載なし
すくすく(こ)	(スクヨカと同根) 強い勢いで、滞りなく進むさま。ずんずん。	記載なし
すくすくし	(スクヨカと同根。堅く真直ぐで、しなやかな弾力性に欠けている意) ①いかにも堅苦しい。 ②いかにもきまじめで、一本調子だ。 ③無愛想である。そっけない。	記載なし
すくよか	(スクミ(疎)・スクスクシと同根。硬直しているさまが原義) ①険阻なさま。 ②そっけないさま。ぶっきらぼうなさま。無愛想なさま。 ③真面目なさま。 ④硬く、しっかりしているさま。くずした所のないさま。 ⑤丈夫・健康なさま。	スクは、スクム(竦む、かたくなでうごかなくなる意)・スクスクシ(いかにもかた苦しいの意)のスクと同根。語根スクは硬くまっすぐである意。スクヨカは、スクな感じを与えるさま。しっかりしている、きちんとしている意。また、やわらかな情味に欠ける意。肉体的あるいは精神的にしっかりしているさまをいう用法は、現代語の「すこやか」につながっている。 ①体がしっかりしている。丈夫である。元気である。 ②まじめでしっかりしている。 ③物事がきちんとしている。 ④無風流である。無粋である。 ⑤そっけない。無愛想である。 ⑥山などが険しい。

主要五辞典の他に、『暮らしのことは 擬音・擬態語辞典』の重複副詞「すすすく」の記載内容を挙げる。

「すすすく」

時の経過に従い滞ることなく順調に成長・発達する様子。子供や植物が順調に成長して丈が伸びる場合に用いるほか、ひげが伸びる時などにも使う。植物では特に筍の成長ぶりをいう。平安時代の『竹取物語』に「この児、養ふ程にすすすくと大きになりまさる」とあるが、この成長の異常な早さは竹との関連を想起させる。

【参考】 奈良時代の『古事記』に「楽浪路（ささなみち）をすすすくと我が行せばや」とある。滞らない点は現代と同じだが、成長ではなく移動の様子。（小島聡子）

これは現代語における「すすすく」の語釈であるが、古代語における「すすすく」にも触れている。現代語においても、滞りなく成長・発達する様子を表し、古代語と共通することがわかる。古語辞典においても、副詞「スクスク（ト）」の語釈は多くが「滞りなく進む」で変化がないことから、副詞「スクスク（ト）」の意味・用法はほとんど変化しなかったと考えられる。

三、先行研究

三―一 和田利政氏「『すくよか』考」

スク系語彙に関する先行研究としては、和田利政氏の（一九八三）『『すくよか』考』（『国学院大学大学院紀要』14）が挙げられる。和田氏がまとめた結論を次に引用する。

- I. 人との応接における言動に関して、内心の感情を押さえ、表向きの立場を分別して理性的に振舞うさまを、内心との対比において表す。また、常にそれのできる人の性格をいう。
 - II. 人の心身の状態について、不安定・不健全であった経過を踏まえて、それと対比的なある時点での安定した健全な動作・状態を表す。
 - III. 衣服・書状・絵に描く山容について用いられた少数例についても、それらの用い方・描き方が、公的・儀礼的・様式的であるさまを、私的・日常的なものとの対比において表している。
- 右のような、対比概念を踏まえて表される健全性や公的・理性的な性質に共通する実質概念を求めると、それは強さ・固さ・こわさということであろうか。これは、同根と目される動詞「すくむ」が、本来柔らかであるべきものについて、それが固くこわばることを表すのと深くかかわっていると思われる。

『宇津保』『源氏』以降の用例を引いて考察されているのだが、古くからの基本的意味や中古の変遷を考える上では、さらにそれ以前の用法も考慮して分析する必要があるだろう。そして、結論については、概ね小学館

『古語大辞典』の語誌記載事項と同様で、実質概念は「強さ・固さ」にあるとしている。動詞「スクム」との関わりにも触れられているが、特に「スクム」の用例を挙げて考察されているわけではないため、実際に用例を分析して考察したい。なお、付記において、「同根と目される」「すくむ」「きすく」「すくすくと」「すくすくし」との比較はしなかった。これらの語の意味的關係、および「スクヨカ」の語義については、木之下正雄氏『平安女流文学のことば』に簡明な説明がある」と述べられている。

三二 木之下正雄氏『平安女流文学のことば』二九 すくむ きすく すくよか すくすくし

和田利政氏(三一参照)も参考にされていた、木之下正雄氏のスク系語彙の説明をここで紹介する。木之下氏は『平安女流文学のことば』(一九六八、至文堂)で、スク系語彙の根本となる「スクム」、語根スクについて次のように述べている。

名義抄に「眠 スクム」とある。皮膚が固くなって、たこになることである。語根スクは、柔軟であるべき肉体が固くなって直線になる、硬直するさまをさす。「すつくと立ち上がる」のスクトもこの語である。

語根スクは、「柔軟であるべきものが固くなるさま」を表すということで、これを基準に「スクム」「スクヨカ」「スクスト」「スクスکش」についても説明されている。以下に、適宜抜粋し、紹介しておく。

すくむ 寒さ・立ち疲れ・悲しみなどで、体が硬直するさまをさす。…

また、身体以外の衣・紙・文字・心の持ちようが、凝固して柔軟でなくなることを表わす。「すくみたる衣ども押しやり。厚肥えたる(衣)重ねて」(紫式部四七六)。「すくみたる衣」は「厚肥えたる」の反対である。大系に、縮んでしわになった衣と注するが、中宮の御供の公式の服装なので、こわばった温もりのない衣服で、字類抄の「衣スクヨカナリ」と同じであろう。それを柔らかい温かい着物に着換えたのである。「唐の紙のすくみたるに」(梅枝三 一七三)も厚くて固い紙であろう。

「スクヨカ」については、意味をA～Dの四つに分けて説明されている。

A 身体について 「(犬宮ハ)いと大きにて首もすくやかなり」(宇「蔵開上」二 三二八)。赤ん坊の首がしっかりしているさまである。「(明石入道ハ)昼は日一日いをのみ寝暮し、夜はすくよかに起きゐて」(明石二九三)。体を崩さずにしゃんと起きて坐っているさま。「おとど、いとすくよかに起きゐ給ひて」(宇「国譲下」三 二九六)。今まで臥していたのがまっすぐに起き直って、の意味である。

スクヨカは体がまっすぐにしゃんとしているさまをさすが、広く「強健」の意味に用いられる。ただ、現代語の「強健」よりも意味が広く、その折の体の調子・気分にも用いられる。「今日はかかる(昇進ノ)御よろこび、(柏木ガ)聊かすくよかにもやとこそ思ひ侍りつれ」(柏木四 三二)、「(源氏ハ此ノ頃ハ)すくよかにも思されず」(御法四 一九〇)。体の調子がよい、気分がすぐれる、の意味である。

B 山容が直線的で、なだらかでないさま。「すくよかならぬ山の気色」(帚木一 六九)。

C 紙や衣服などの厚く固く、ぴんと張っているさま。「いとこはくすくよかなる紙」(堤「虫めづる姫君」

三八〇)、「御装束すくよかに」(栄華「根合」下四五二)、字類抄「衣スクヨカナリ」。

D 源語【引用者注】『源氏物語』のこと】のスクヨカの大部分は、応待のしかたや性質が直線的で固くてなだらかでない感じに用いられる。「気強」「剛直」に近い。キスクと殆ど同じ意味で、「両語とも「きまじめ」と訳されるが、キスクは謹しみの気持ちが含まれて尊敬の気持で使われ、スクヨカは「ごつごつとした剛直な感じが主で、「無愛想」の方に傾く。「(僧都ハ)すくよかに言ひて物ごはきさまし給へれば」(若紫一 一九一)。言い方が剛直で柔らかかみがない。つまり、無愛想なさまである。「(夕霧ハ)いとまめやかにすくよかに物し給ふ人を」(夕霧四 一一三)。まじめで堅く、である。勿論男女関係についてである。現代語の「きまじめ」よりは、堅い、強い感じを持っていたと思われる。

「スクヨカ」は語根「スク」の「固くなるさま」から派生して意味が広がっていくことが、簡明に説明されている。Dの説明で、現代語の「きまじめ」より堅い、強い感じを持つとされている点は根拠がはっきりしていないが、平安文学における「スクヨカ」が表す「きまじめ」さがどのようなものかがわかる。

また、「すくすくと」の段では、「スクスク(ト)」と「スクヨカ」の差異に触れている。

歩行(応神紀、狭衣三九八)、子どもの成長(竹取二九、宇「俊蔭」一 七四)に用いられ、直線的に進んで滞ることのないさまを表す。現代語「すくすく」「すたすた」。スクヨカが「硬直」の「硬」の意味を多く保っているのに対して、「直」の意味を多く保っている。

「スクヨカ」と「スクスク(ト)」では、表す性質に違いがあることがわかるだろう(「滞ることがないさま」という点は、動作・処作のスムースさとも見ることができものがわかる)。そして、「スクスク(ト)」は「スクヨカ」にあるまじめさを表すことはなく、「歩く状態そのものを表す」と述べられている。一方で、「スクスクシ」については、

すくすくと歩く状態から受ける、脇目もふらないひたすらな感じ・性質を表す。

とある。そのためか、「スクスクシ」の意味・用法は幅があり、「物の言い方、待遇のしかた」「人間の性質」「紙や消息文」などの、総じて「一本気なきまじめさ」を表すと述べられている。

四、スク系語彙

四―一 単純語幹スク語彙

まずは、スク単純語幹の動詞「スクム」の用例分析から始めてみたい。「スクム」は、「状態が固く変化する」を基本的性質とすると考えられ、身体に関する用法の他、人の心や性質についても用いられる。『日国二』によれば、初出は『蜻蛉』で、次に出現するとされるのが『宇津保』である。そのうちの二例を挙げる。

(一)「あまたある中に、これはおくれじおくれじと惑はるるもしるく、いかなるにかあらむ、足手などた

だすくみにすくみて、絶えいるやうにす。」『蜻蛉』（傍線・波線は引用者、以下同じ）

(二)「かく、いみじうやみ給つれど、うみ給てはことなる事もなし。ただことなく、御みすくみてぞおはする。」『宇津保』

動詞「スクム」は初出例から、足や手といった体の一部が引きつるという意味であり、次の『宇津保』でも体がこわばる意味である(二)の他では「身もすくみにて」。その後の『落窪』の三例(「口すくめたるかた」「身もすくむ心地す。」「すくみたるやうにてる給へり」)までは同じような身体に関わる用法で、ひきつったり、身をちぢめて固くなるさまを表している。しかし、『源氏』以降はそれに限らず、人の心や性質についても用いられる精神的な用法が現れるようになる。

(三) ひとおもむきにすくみたまへる御心にて、人の御心動きぬべきこと多かり。『源氏』真木柱

(四) 唐の紙のいとすくみたるに、草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、…『源氏』梅枝

(五) 大臣の御おきてのあまりすくみて、なごりなくくづほれたまひぬるを、世人も言ひ出づることあらんや。『源氏』藤裏葉

(三) は髭黒大将の「融通のきかない」性格を表している。「ひたおもむきに」つまり一徹であることも共起されていることから「融通のきかない」固い性格であることがわかる。(四)は唐の紙が固いことを表している。(五)は雲井雁と夕霧を結婚させようとしなかった、内大臣(雲居雁の父)の態度が頑なであったことを表している。いずれも「固く変化する」さまから性格などの精神的「固さ」が強調され、物などの物理的固さを表わす原義から派生した意味・用法であると考えられる。

次に、形容動詞「スクヨカ」の用例分析のあらましを、まず先に述べる。『日国二』によれば、初出は『宇津保』で、三例ある。その意味・用法は、身体(二例)と紙という物理的な物の性質について「しっかりとしている」様子や、紙の固さをいう。初出の『宇津保』の用例は、子どもの首が座って、しっかりとしている様子を表していて、順調に成長した「結果」として、首の状態が「固い」もしくは「強い」ことを、「スクヨカ」で表している。そして、この例からも「スクヨカ」が表すものの基本は、「固さ」「強さ」であるということがわかる。その点は、辞書や先行研究でも指摘されているとおり、動詞「スクム」と関連の深い語と考えられる。

そして、『源氏』の用例からは、「スクム」と同様に様々なものを対象とし、意味用法も広がっている。平安後期からは「毅然とした態度」など男性的なもの、理想的な男性を表すものも現れ、女性的なもの、理想的な女性を表す「ナヨビカ」や「タヲヤカ」と対比させることができるようになっていく。以上が分析してみても概観であるが、以下に具体的に用例を挙げながら解説していく。まずは、『宇津保』の三例を見ていく。

(六) 女御のきみ、かきいだきたてまつりてみせたてまつり給。大宮見たまへば、いとおほきにて、くびもすくよかなり。『宇津保』(座っていない首の柔らかさに対して)しっかりと座っている様子)

(七) ちうし(中紙)のすくよかなるにつつみて、山より少将のてにいとよくかきにせて、…『宇津保』
 (八) おとど、いとすくよかにおきぬたまひて、「かしこにはつげつや」とのたまへば、…『宇津保』

(六)は『宇津保』の最初の例であり、「スクヨカ」の初出例である。ここでは、首がしっかりすわっていることを表している。「新全集」の頭注にもあるように、首がすわるのが生後三か月ほどであることを考えると、「五十日」ですでに首がすわっているのは非常に早い成長といえ、この文脈から著しい変化、つまり成長を象徴する表現であるとも考えられるが、ここでの「スクヨカ」は成長の結果として「首がしっかりすわっている」ことを表している。また、形容動詞の状態を表現する働きを考えると、首がすわっている、首の状態として「固さ」や「強さ」を表していると考えることができる。

続く『宇津保』の他の例(七)(八)は、いずれも(六)と異なり、より「固さ」や「強さ」を基にしたことがわかりやすい例である。(七)については、中紙、つまり品質が中程度の優美ではない紙の飾り気がないことを表している。そのような紙は風流ではないので、後の「無風流」にもつながる。人ではなく物に対して用いられた初めての例である。(八)は引用部分の前に、「御衾を引きかづきてうつ伏して」であったのが、元気になって起き上がるという文脈であり、元気になることを表すのに用いられた例である。

『宇津保』の三例を見てきたが、いずれも「固さ」や「強さ」が根本にあり、もともと持っている性質としてではなく、「弱い」「柔らかい」「元気でない」ものなどからの変化や対比的な用いられ方である。例えば、(六)では、初めは座っていない柔らかい子どもが首が座っている、つまり、しっかりとしてきて、固まっているイメージが想起される。他の例も柔らかい紙との対比で紙の「固さ」、伏して元気のない状態から変化して、身

体が元気な(丈夫な)「強さ」を表している。この「固さ」「強さ」という点で「スクム」と通じるものがあり、「スクヨカ」は「スクム」の持つ、「固さ」「強さ」といった基本的性質から派生しているようで、意味的に見ても語幹を同じくすると考えられる。

次に、『宇津保』の次に用例が見られる『枕』以降の例を見ていく。『枕』以降は、「生真面目」「そっけなさ」に加え、「しっかりとした」「毅然とした」男らしさも表すようになる。形容動詞「スクヨカ」は、『枕』以降多数の例があるため、意味・用法として典型的な例を抜粋して挙げていく。

(九) されど、すくよかなるは、一夜ふけぬ。御門危かなり など笑ひて出でぬるもあり。

『枕』

「生真面目な、几帳面な人」という意味である。女性のもとに顔を出しに来る男性について述べられている。女性に対して特別に思いをかけている人は追い払われても夜が明けるまで座り続けるが、真面目だと帰って行ってしまうということである。後述する形容詞「スクスクシ」の『枕』の例でも、まじめな人の歩き方に用いられていて、『枕』ではスク系の語を「生真面目さ」に関わる語として考えていたきらいがある。

(二〇) から(十二)は『源氏』の例である。『源氏』の例は三十四例と多く、意味の幅も著しい。「スクヨカ」が男らしさを表すようになるきっかけも『源氏』の例にあると考えられる。

(二〇) 「かの祖母に語らひはべりて聞こえさせむ」と、すくよかに言ひて、ものごはきさましたまへれば、

若き御心に恥づかしくて、えよくも聞こえたまはず。『源氏』若紫

(十一) すくよかなる世の常の人にならひては、まして言ふ方なき御けはひありさまを見知りたまふにも、思ひのほかなる身の置き所なく恥づかしきにも、涙ぞこほれける。『源氏』真木柱

(十二) これは才の際もまさり、心用ゐる男男しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえためり。『源氏』

藤裏葉

(一〇) は源氏の申し出に対して僧都が返事をする場面で、その僧都らしい無愛想な言い方を表している。これは「そつけなさ」を表していて、「生真面目」とともに平安時代を通して用例のある用法である。(十一) は「スクヨカ」の(七)と同じような「無風流」を基にした用法である。「世の常の人」つまり並大抵の人に かかって、特別に風流でない、おもしろみがないことを表すのに用いられた。(七)の固い紙の無風流さと通じると考えられ、意味・用法が「固さ」や「強さ」から広く派生していったことがわかるものである。(十二) は前述のとおり、「スクヨカ」が男らしさを表すさきがけとなる例である。「心用ゐる男男しく、すくよかに…」とあり、男性のしっかりした性質を表現していて、男らしさを表す最初の例である。『源氏』以前は「まじめ」や「無愛想」を基にした例が中心だったが、それとは異なる用法で、意味や用法が拡大していることがわかる。最後に挙げる『とりかへ』の例も男らしさを表す例で、『とりかへ』で多く出現するようになる。

(十三) 「さはいへど、いとすくよかに、ものあざやかなるところさへ添ひにけり」と、目もあやに御覽せらる。『とりかへ』

(十四) さはいへど、けけしくもてなし、すくよかなる見る目こそ男なれ、とり込めたてられてはせん方なく心弱きに… 『とりかへ』

(十三) は男君が大将として出仕して、帝に奏上する様子を「毅然とし」たものとしてと表現している。それまで女君が大将として男として振る舞っていたのが、本物の男になって男らしい毅然とした感じが加わったという文脈である。『とりかへ』では、度々男らしさを表す「毅然としたさま」を表すのに用いられる。参考に「毅然としたさま」を表す用例(十四)を挙げるが、この場合は男性に対してではなく、女君が扮する中納言の普段の男らしい振る舞いや外見を「すくよかなる」と表現している。

『源氏』以降平安後期の作品では、男性について「毅然としている」「しっかりしている」という用法が多くみられる。男性らしさを表す語として普及したと考えられる。さらにそれは、女性らしさを表す形容動詞「なよびか」や「たをやか」の対義語としての位置を得ていくようになる。

四―二 重複形スクスク系語彙

重複情態副詞「スクスク(ト)」は、平安和文作品中では、『竹取』、『平中』、『宇津保』、『寝覚』、『狭衣』に出現するが、『日国二』によれば、初出は『古事記』に遡る。いずれも「勢いよく成長していく過程」や「(空が)勢いよく明るくなっていく過程」、『順調に前に進む様子』などに使われている。これらに共通する「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進む」というのが、「スクスク(ト)」の基本的性質と言えるだろう。特に変化や動きが進む(過程)の様子や状態を「スクスク(ト)」で表している。「スクスク(ト)」の全用例においては、

この基本的性質を大きく外れるような変化や抽象化は見られない。まずは、初出の『古事記』の用例を見ていく。

(十五) この蟹や 何処の蟹 百伝ふ 角鹿の蟹 横去らふ 何処に至る 伊知遅鳥 美鳥に著き 鴉鳥

の潜き息づき しなだゆふ 楽浪路を 須久須久登 我がいませばや 木幡の道に遇はしし嬢子…

『古事記』

応神天皇の歌謡で、食膳に供された蟹に寄せて歌ったものである。楽浪路(ささなみじ)をずんずん歩いていくと解釈できて、ここでの「スクスク(ト)」の用法は、勢いよく滞りなく移動する、前に進む過程を表すもので、「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進むさま」に沿う例である。

続いて、平安和文学作品の用例を挙げていく。

(十六) この児、養ふ程に、すくすくと大きになりまさる。 『竹取』

(十七) 『秋の夜の夢ははかなくあふといふと』といへば、をとこ、『春にかへりてまさしかるらむ』といひけるほどに、すくすくとあかくなりければ、「いまはやおはせむところへおはしね」といへば、

… 『平中』

(十八) かかるほどに、このこはすくすくと、ひきのぶものやうにおほきになりぬ。

『宇津保』

(十六) はかぐや姫が滞りなく勢いよく成長していく様子を「スクスク(ト)」で表している。(十七) 夜が明け、「暁の空」「辺り」が見る見る明るく変化していく様子を表している。(十八) は『竹取』と同じように成長する様子で、「ひきのぶものやうに」とあることから、成長の著しさがわかるだろう。この「宇津保」で出現してから『枕』にも『源氏』にも出現しないが、『寢覚』と『狭衣』で一例ずつ現れる。

(十九) いづかたにも、いと聞きにくく、くるしく」など、うたがひなく、すくすくと言ひつづけたるを聞き給心地、世のつねならず、あさまし。『寢覚』

(二〇) それよりやがて火の光見ゆる方様へ、すくすくとおはすれど、殊更になよやかにしなし給へる御衣の音なひは、あはただしき風の紛れにて、聞きつくる人もなし。

『狭衣』

(十九) は途切れることなく話す様子を表していて、これまでの『古事記』の移動や『竹取』、『宇津保』の成長とは異なる用法である。しかし、「滞りなく進む」という点では共通する。(二〇) の『狭衣』の例は、『古事記』と同じく歩く様子、その過程について、「動きが勢いよく、滞りなく進むさま」を表している。平安以前の『古事記』の例も踏まえて分析してきたが、どの用例も共通して「状態の変化や動作の動きが勢いよく、滞りなく進むさま」で、その過程を表すことがわかった。この点では、重複副詞「スクスク(ト)」は、大きな変化がないと言える。また、変化の過程を表すということは、変化の結果を表す形容動詞「すくよか」との

違いでもある。

次に形容詞「スクスクシ」について述べる。初出は『日国二』によれば、『枕草子』である。ここでは副詞「スクスク(ト)」の基本的性質「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進むさま」に通じる「さっさとまっすぐ歩く」という意味・用法であり、『狭衣物語』に出る副詞「スクスク(ト)」の用例(二〇〇)とほぼ同じ意味のように思われる。また、歩く過程を捉えている点も重複副詞「スクスク(ト)」に通じる。

(二十一) なほあけながら帰るを待つに、君たちの声にて、「荒田に生ふるとみ草の花」とうたひたる、このたびは今少しをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ、すくすくしうさしあゆみて往ぬるもあれば、笑ふを、…『枕草子』

ここで注目するのは共起する「まめ人」である。つまり「まじめな人」の歩き方を「スクスクシ」と表現したことは、この後のスク系語彙の意味の広がりには大きな影響を与えているのではないだろうか。そこまで言いきれなくても、真面目さとの関連はあるようで、同じく『枕』に出る形容動詞「スクヨカ」の用例は、「生真面目な人」という意味で使われている。

『枕』の後に「スクスクシ」が出現するのは、『寝覚』、『とりかへ』の二作品である。『寝覚』以降は、副詞「スクスク(ト)」の「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進むさま」という基本的性質と通じる意味・用法ではなく、「生真面目さ」や「そっけない・実直な」様子といったものを表すようになる。この意味・用法の変化を、用例を挙げながら詳しく解説していく。

(二十二)『いまは心やすく』と、たちかへり、例のひまなく』と、人も思ひ、わが心にも、なまうるさく
心化粧せられ給ふに、御参りのすぐすくしき御消息のおきてよりほかに、御消息もなく、まして、
みづからは見え給はぬを、人々もあやしく思ふに、… 『寝覚』

(二十一)は「すぐすくしき」と濁音の形になっていて、何らかの解釈や理由があると考えられるが、意味は「便りが事務的で、私事のないまじめなものである」ことを表していて、重複形容詞「スクスクシ」の意味の傾向に沿うと判断し、考えていく。これは、(二十二)の『枕』の用例とは異なり、完全に副詞「スクスク(ト)」の基本的性質を含まない異なる用法である。

(二十三)「みだり心地さめざめしくのみとりなし…」と、いとすくすくしく、あざやかに言ひ給へるに、
… 『寝覚』

(二十三)は寢覚の上が発言する様子を表現した用法である。「あざやかに」とあることから、淡淡とはつきりと話す様子は、副詞「スクスク(ト)」の(十九)『寝覚』の用例と同じだろう。しかし、この形容詞の用法は、話し方よりも話している寢覚の上のそつけない態度に焦点が当てられており、副詞「スクスク(ト)」とは少し異なる。ただし、過程を捉えている点で同じである。

(二十四) かかる所にいつとなくつくづくとながめたまふ姫君たりの御心のうちいかならんと、いみじう心苦しう思ひやらるるに、この世近き方はなく、唐国の心地ものすくすくしう深きものあはれなどは知られたまはずやあらん、… 『とりかへ』

(二十五) 退けひき返事せざらんも、わが身いとあやしかるべければ、例のすくすくしううち書きて、… 『とりかへ』

(二十四) は「ものすくすくし」のかたちであるが、唐土育ちの姫君について、日本的な風情がない、もしくは知らないで、無風流であることを表すのに用いられている。(二十五) は手紙の返事を無視せず、真面目に書くことを表している。このように、『寢覚』以降の「スクスクシ」は「生真面目さ」「実直さ」や「そっけなさ」「無風流」を表すようになり、平安時代の用例の中で、『枕』から『とりかへ』までで変化が生じている。平安時代を通して見ていくと、意味や用法の変化はあるが、『枕』の用例(二十一)が副詞の『狭衣』(二〇)と同じ用法である点、(二十一)(二十三)においては過程を捉えている点など通じる部分があり、副詞「スクスク(ト)」と形容詞「スクスクシ」は同じ系統として考えられる。

五、まとめ

本論では、語幹スクの重複系と単純語幹系との差異や関係性を探るため、各語の用例を分析し、考察してきた。その結果を最後に総括する。

まず、動詞「スクム」は「状態が固く変化する」を基本に、身体に関する用法や、人の心や性質に関する用法が見られる。初出は『蜻蛉』で、『宇津保』『落窪』が並び、いずれも身体に関わる用法で、ひきつたり縮めて固くなることを表しており、変化の過程ではなく、結果の状態に視点があると考えられる。その後の『源氏』以降は、身体に限らず人の心や性質についても用いられるようになる。融通のきかない「固い」性格や頑なな態度、唐の紙の「固さ」などがあり、「固さ」を強く残しながら派生していく。この動詞「スクム」と関連の深い語が、単純語幹系の形容動詞「スクヨカ」である。

形容動詞「スクヨカ」は動詞「スクム」と同じく単純語幹系で、「固さ」や「強さ」を基本とした意味・用法である。主に人の性格や体について「しっかりとしている」様子（強さ）や紙などの「固さ」を表すのに用いられる。また、「スクム」と同じように成長や変化の結果として「強い」もしくは「固い」状態に視点があるのも特徴である。初出の『宇津保』には三例あり、成長して首がしっかりとっている様子、紙の素材の固さ、伏した状態から回復し元気な様子を表すのに、それぞれ用いられている。次の『枕』では「固い」イメージから「生真面目さ」を表し、後の例にもよく見られるようになる用法である。『源氏』以降はさらに派生し、無愛想な言い方などから「そっけない」様子、固い紙の風流の無さから「無風流さ」、さらには男性の「しっかりと」様子や「毅然とした」態度へと変わり、平安後期には男性らしさを表す語となっていくと考えられる。いずれも「固さ」や「強さ」を基に派生していったものと言えよう。このように動詞「スクム」と形容動詞「スクヨカ」には共通点が多く、意味・用法の根本にあるものに相通じるものがあり、同じ系統として考えることができる。

続いて、重複系の副詞「スクスク（ト）」と形容詞「スクスクシ」についてまとめる。

重複情態副詞「スクスク(ト)」は、平安和文作品中では、『竹取』、『平中』、『宇津保』、『寝覚』、『狭衣』に出現するが、初出は『古事記』である。いずれも「勢いよく成長していく過程」や「(空が) 勢いよく明るくなっていく過程」、「順調に前に進む様子」などに使われている。これらに共通する「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進む」というのが、「スクスク(ト)」の基本的性質と言えるだろう。特に進む(過程)を「スクスク(ト)」で表している。具体的には、『竹取』でかくや姫の成長の勢いや滞りないことを、『平中』で夜が明けて明るく変化していく様子を、『寝覚』で途切れることなく話す様子、『狭衣』で歩き方について滞りなく勢いよく進む様子を表している。いずれの用例も、基本的意味と考えられる「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進む」という要素を共通して持っていると考えられる。

形容詞「スクスクシ」は、初出の『枕』(二十一)では副詞の基本「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進む」と通じる用法であるが、後の例の用法は形容動詞「スクヨカ」の意味・用法に接近していく様子が見える。初出例(二十一)は副詞の用例(二〇)とほぼ同じ意味である「さつさとまっすぐ歩く」という意味・用法である。この用例では、真面目な人の歩き方で、形容動詞「スクヨカ」の「生真面目さ」に通じるように考えられる。次の『寝覚』(二十二)以降は「生真面目さ」や「そっけなさ」を表す用法となる。このように形容動詞「スクヨカ」に通じるように見える例があるが、『枕』の例(二十一)の歩き方や『寝覚』の例(二十三)の話し方など、動きや変化の過程を表現している点では副詞「スクスク(ト)」に通じる。初出例(二十一)が副詞と同様に「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進む」を基にした意味・用法であることから、もとは副詞「スクスク(ト)」と形容詞「スクスクシ」は同じ系統であると考えられる。

以上のように、「スク」語幹語彙四語の意味と変遷はとらえなおすことができると思われる。最後の「スク

スクシ」でも述べたように、重複系「スクスクシ」と副詞「スクスク(ト)」とは、「固さ」や「強さ」を基にした単純語幹系とは差異があり、「過程」を表現しているなどの共通点があることから、重複系の副詞「スクスク(ト)・形容詞「スクスクシ」と、単純語幹系の動詞「スクム・形容動詞「スクヨカ」とは異なる系統(少なくとも平安時代には)として捉えるべきと考える。そして、それがやがて形容詞「スクスクシ」と形容動詞「スクヨカ」が、平安中期以降「生真面目さ」を表すようになったことから、両語の意味は接近していったと考えられる。

「スクム」|| 「状態が固く変化する」を基本的性質とし、身体に関する用法の他、人の心や性質についても用いられる。

「スクヨカ」|| 人の性格や身体について「しっかりしている」「真面目である」様子や、紙の固さを表す。

「スクスクト」|| 「勢いよく成長していく過程」「順調に前に進む様子」などを表し、基本的性質は「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進む」である。

「スクスクシ」|| 初出の『枕』の用例では、「さつさとまっすぐ歩く」ことを表し、基本的性質に通じる用法であるが、それが「真面目な人の歩き方」を表すこともあり、後の例の用法は「スクヨカ」の意味、用法に接近していく。

今回取り上げた、「スク」語幹語彙のように、語幹が共通して、語構成や品詞(形容詞、形容動詞、副詞など)を異にする語彙は、他にも多い。それらのような派生語間における意味の詳細な分析が、まだ必要な語彙は少

なくない。また、それらの品詞の異なる語の間における、意味の変化の方向や変化時期も、それぞれで微妙に異なっている。今後も、比較する精度をより精密にして、より詳しい派生関係を解明していきたい。

付記

本稿は、久保が次の題名にて、学習院大学大学院へ二〇一三年度に提出した修士論文（安部清哉教授御指導）の中で取り上げたものである。修論から本稿をなす過程でも安部教授に御助言いただいたところがある。『派生関係様態用言語彙の語彙史研究——平安和文の副詞・形容動詞の意味変化を中心に——』

注

- (1) 東郷吉男（一九八二）「平安時代における重複型語幹の形容詞について——かな系文学作品の用例を中心に」『国語学』一三〇で、ツヤ系について詳細な分析がされている。東郷氏は同論文において、他にキラ系、ハナ系、ホノ系の分析をされている。その他、次のものも参考とさせて戴いた。蜂矢真郷（一九九八）『国語重複語の語構成論的研究』塙書房、蜂矢真郷（二〇一〇）『国語派生語の語構成論的研究』塙書房、蜂矢真郷（二〇一四）『古代語形容詞の研究』清文堂出版。
- (2) 久保（二〇一五予定）「平安和文資料における『ナヨ』系派生語彙の語義比較」。

【参考文献】

○関連論文

木之下正雄（一九六八）『日本文法新書 平安女流文学のことば』至文堂

和田利政（一九八三）「『すくよか』考」『国学院大学大学院紀要』十四

久保香珠（二〇一四）「古代語体系から近代語体系への移行期における和漢対立語の意味変化『のがる』『まぬかる』

を例として」『学習院大学国語国文学会誌』五七

久保香珠（二〇一五予定）「平安和文資料における『ナヨ』系派生語彙の語義比較―ナヨナヨ・ナヨヨカ・ナヨラカ・

ナヨビカー」（投稿中）

○辞典類

『日本国語大辞典 第二版』小学館 二〇〇一年

『古語大辞典』小学館

『角川古語大辞典』角川書店 一九四八年

『岩波古語辞典』岩波書店 第一版一九七四年 補訂一九九六年

『古典基礎語辞典』角川学芸出版 二〇一一年

『暮らしのことはば 擬音・擬態語辞典』講談社 二〇〇三年

○用例文の引用文献

高木市之助、富山民蔵編『古事記総索引 本文編』平凡社 一九七四年

山田忠雄『竹取物語総索引』武蔵野書院 一九五八年

曾田文雄『平中物語総索引 本文篇』初音書房 一九六九年

宇津保物語研究会『宇津保物語 本文と索引 本文編』一九七三年

『日本古典文学大系 二四 蜻蛉日記』岩波書店 一九八九年

『日本古典文学大系 一三 落窪物語 堤中納言物語』岩波書店 一九五七年

『枕草子総索引』右文書院 一九六七年

- 『日本古典文学大系一四・一八 源氏物語一・五』岩波書店一九五八年
石井文夫・青島徹編『紫式部日記用語索引(改訂増補)(復刻版)』牧野出版一九九九年
東節夫編『御物本 更級日記総索引 本文編』武蔵野書院一九五六年
『日本古典文学大系七八 夜の寝覚』岩波書店 一九六四年
『日本古典文学大系七九 狭衣物語』岩波書店 一九六五年
鈴木弘道著『とりかへばや物語の研究 校注編 解題編』笠間書院一九七三年

A study of the comparison about vocabulary which has a stem a word “Suku”

— “Sukumu・Sukuyoka” and “Sukusuku-to・Sukusuku-shi” —

KUBO, Kaori

I show the findings about a derivative told to have a common stem of a word “Suku”. And its derivatives are a verb “Sukumu(meaning of cringe)”, an adverb “Sukusuku-to(quickly and healthily)”, an adjective “Sukusuku-shi”, and an adjective verb “Sukuyoka”. These seem to be apt to be thought that they have a common stem of a word “Suku”. However, there are various tendencies in the single form “Suku” and the duplicate form “Sukusuku”. I studied their examples, for I clarify each difference and similarity about four ward, deriving a stem of a word “Suku”. As a result, there is a similarity between “Sukumu” and “Sukuyoka”, they are the single form of a stem “Suku”. They located in the root “hardness” and “strength”. On the other hand, the words that they are the duplicate form, “Sukusuku-to” and “Sukusuku-shi” located in the root “a movement or a change is smooth”. In other words, the four words should not be lumped together in the stem “Suku”, but can be divided into two systems, a system of the single form and a system of the duplicate form. In addition, in the late Heian period, meaning of the adjective “Sukusuku-shi” and the adverb “Sukuyoka” drew together. Both of these words had represented the “graviditas” and “brusqueness”. However they were divided into two systems, there is a possibility that their meanings had come close after, because of the closeness of the stems— “Suku” and “Sukusuku”.

(日本語日本文学専攻 博士前期課程修了(平成二十五年))

